

金婚記念の山旅紀行

明子（めいこ）に涸沢カールと穂高の絶景を見せてやろう

2014.9.22(月)～2014.9.27（土）（H26）

谷 幸一

taniko@zeus.eonet.ne.jp

§ プロローグ

9月21日は私達の結婚記念日。

1964年（昭和39年）に結婚以来今年で50周年の節目を迎えた。金婚式の記念として旅をしたいと思う。

残されたお互いの人生、どれだけあるかは判らないけれど改めて50年前の気持ち思い起こし、これからの生き方の“道しるべ”を見付ける旅をしよう。

高木（明子の旧姓）の両親の猛反対を押し切って結婚した二人にとって新婚の第一歩を踏み出した“同じ日に同じ場所の同じホテル”を訪ねる事から全てを始める旅にしようというのは二人とも同じ思いであったから上高地への旅は迷う事無く決まったのだった。

けれども私にはもう一つ、以前から温めていた別の想いがあった。

上高地へ行くなら更に脚を伸ばして、“明子に標高2300mの涸沢カールと穂高の絶景を見せてやりたい”。

けれどもこんな想いは私の体調不良のため、歌の文句ではないが「一年前はおろか半年前にも」口には出来なかったのだった。

5年ばかり前に発症した私の脊柱管狭窄症は次第に悪化し今年に入った頃には100歩も歩けない状態になっていた。

長期間の保存療法や痛み止め薬に頼った対症療法も遂に限界を迎え、手術に踏み切ったのは今年三月であった。

4月半ばからのリハビリも一筋縄では行かず、ようやく明子に対して“涸沢迄登ろう”の話を口に出れるようになったのは6月ごろであった。まだ残るイヤな痛みを何とか「我慢の限界内」に抑え込む事が出来た時は早や8月も末になっていた。

リハビリのジム通い、野外のウォーキングをこなし、ようやくリュックを担いだトレ

2014,9,22～2014,9,27

ーニングを経て“どうにか行けそうだ！”と思えるようになったのは出発間際であった。

期待半分不安半分であった出発時の状態に対して、上高地に入った翌日からの体調は尻上がりに良くなったのは嬉しい誤算であった。

涸沢の登りもどうにかこなし、半世紀ぶりに立った涸沢は、今年は少し早いナナカマドの紅葉の季節、錦繡の裳裾を纏った穂高の絶景を目にして我が明子サンは驚嘆し歓声を上げたのでありました。

星明りにくっきりと浮かぶ穂高岳の稜線、モルゲンロートに染まる奥穂高や北穂高、ザイテングラードの 2500m 辺りから眺めた前穂高北尾根や吊尾根、雪渓に遊んだ午前など心の壁に刷りこまれるような素晴らしい自然との戯れが私達の金婚式記念の山旅に錦上花を添えてくれたのでありました。

涸沢を降り平坦な梓川沿いの左岸の道を歩きながら、快調に歩を進める私の体調の予想以上の回復ぶりもこの山旅の喜びを倍加させてくれたのでした。

二人とも胸一杯の満ち足りた気持ちで 50 周年の次の一步を踏み出す事が出来る幸せを噛みしめる旅でもありました。

6 日間やそこらで「これからの人生の道しるべ」なんて、そう簡単に見つかるものではないけれど・・・。

二人ともこんな健康な山旅をしながら思ったのは“生ある限り我が思いを實現実行出来る健康な心身を維持しよう”という平凡だけれど最も大切な事であった。

§ 9 月 22 日（月） 第一日目—— 上高地へ ——

☆ さあ出かけよう

6 時 AM 光風台の我が家を出発。箕面グリーンロードから名神茨木 IC まで 30 分ほど。

一宮 JC から東海北陸道飛弾清見 IC を経て平湯温泉までそこそ長時間の運転になる。

取敢えず大津 SA で休憩。

一時間を超えないように休憩をとりながらの慎重なドライブではあるけれど、つい八月の初めには一時間の運転後に車を降りた時にはほんの数分ながら腰が“くの字”になる程痛んだ事を思えば今は殆ど痛みを感じなくなったのは嬉しい出来事であった。

養老 SA で休んだ後は以前は尾張一の宮と云っていた一の宮 JC から東海北陸道に入って長良川 SA、「ひるがの高原 SA」まで。

ここは標高 874m、かんかん照りの陽射しの中でも高原の風は涼しい。向いには山を切り開いて作られた白山のスキー場が大きな傷跡みたいに見えて痛々しかった。

☆ 飛弾清見 I C と高山が高速道で繋がっていたのは嬉しかった

2004.年に西穂高と乗鞍岳山行時新穂高ロープウェイへ行った時もやはり飛弾清見 I C で降りて地道の R-158 を走ったのだけれど、間違えて高山市内に入ってしまったが大分時間ロスした記憶があるが、今回は高速の乗継で大いに楽になっていた。

便利になった道路のお蔭で 11:50 には早くも平湯温泉「あかんだな駐車場」に着いた。この名前は一体何のこっちゃ！解りにくい地名やなあー。

片道 346 km を 5:50 分掛かった、ちょっと掛かりすぎやな、休んでばかりやからなと独り言。

駐車場で山靴への履き替えなど山支度をしてバス停へ行ったら 12:20 発の上高地行きシャトルバスに間に合った。

昼飯は上高地で食うか、1160 円の切符を買ってばたばたと乗車。

一般車両を上高地まで入れないようにしたのは良い事だ。

スケジュールはトントんと進んで 4370m の安房トンネルを抜けると間もなく釜トンネル手前で島々からの道と合流、平湯から僅か 40 分で 13:00 に上高地センターに着いた。

50 年前、前夜 8 時過ぎ大阪発「ちくま」に乗り—松本—島々と乗り換え—バスで上高地へ入った時代とはまさに今昔の感の速さであった。

☆ 今浦島みたいな心境

大きなターミナルでバスを降りたばかりの私は周りを眺めて只々オロオロするばかり。まさに今浦島かという心境で暫く辺りをキョロキョロ眺めていた。

街中と変わらない、否それ以上にカラフルなコスチュームのギャル達の群れが大勢屯している光景は、話には聞いていたけれど私の想像を絶するものがあつた。

昨年槍ヶ岳に登った明子は行き帰りに上高地を通っているから今更驚きは無かつたようだけれど、50 年ぶりの私は一瞬少しだけガッカリしたのであつた。

☆ 超人気スポットの河童橋だが

河童橋は代わる代わる記念写真を撮るギャル達で混み合っていたが、この橋の上に立つ頃には私も幾分落ち着いて来ていた。

彼女達の関心は有名スポットの橋だけれど、私達はここから眺める風景によりやく心の安らぎを得ることが出来たのだつた。

前穂高岳と明神岳は交互にガスが取れて見え、前穂吊尾根もクッキリ。

2014,9,22～2014,9,27



50年ぶりに帰ってきた二人。
上高地、河童橋にて
2014,9,22

雪渓を残した岳沢も大きく懷を広げ、梓川は変わらない清流を保っている。
振り返れば焼岳がタバコの煙ほどの薄いガスをたなびかせている。
あの日と何も変わらない姿によりやうく私達も一安心したのであった。

めいこサンは早速土堤に座って梓川の風景をスケッチ、これも何時もの事だ。
私は前穂や吊尾根を飽かずに眺めながらカメラに収めたり 50 年前を振り返ったりしていた。

50 数年前には何度も通過した上高地だけれど、当時は河童橋なんかは横目で眺めて通り過ぎるのが普通であった。あの日もこんなんびりした気分では無かったと思う。こんなにゆっくりと橋や梓川の土堤に留まるのは初めてのよう気がして暫し感慨にふけたのでありました。

心もとない門出ではあったけれど、よくぞ今日までたどり着いたものだ。
上々の天気、陽射しの中では首筋は暑いけれど日蔭に入ればヒンヤリで長袖シャツ姿が心地良い。

☆ そして 50 年前と同じ日に同じホテルへ

時間は少し早かったけれど 15 : 00 にホテルに。

50 年前の今日、即ち昭和 39 年 9 月 22 日この上高地温泉ホテルから私達二人の生活の第一歩を踏み出したのであった。

河童橋の少し川下の右岸、穂高を開いたウェストン卿のレリーフが嵌めこまれた岩壁のすぐ傍に位置するこのホテル、勿論建物は当時からは変わっているが数少ない温泉があるホテルだ。

夕方までの少しの時間大正池までの散歩に出掛けたが、私股関節辺りに多少違和感

2014,9,22～2014,9,27

を感じたので大事をとって田代池の落ちついた佇まいを見ただけで折り返した。



夕暮れの田代池にて、タンニン色が美しい 2014,9,22

夕暮れ近い静かなこの森。

あの時のこの辺の森の記憶は今もう無いけれど、カラマツやしらびそ(とどまつ)の見上げるような大木が林立する様は四年ほど前に訪れたヨセミテの森と何処か似ているような気がするなあとか話しながら夕焼けの焼岳をバックに写真を撮ってからホテルに引き上げた。



50年前と同じ日に
同じ上高地温泉ホテル
に宿泊。

2014,9,22

☆ ♪ 寄れや一寄って来い一安曇の一 ♪

夕食のメニュー、これが又凄い事になっていた。

2014,9,22～2014,9,27

事前に、私達が“他のどの日でも無く今月今日”ここに宿を取った理由を話して置いた事でホテルの料理も“夫婦プラン”という二人で22品という特別メニュー。

とにかく大いに食べ且つ飲んだが、明子がふと見つけた箸袋の裏に地元の唄“安曇節”の歌詞があった。

僕等は50年以上も前から唄っていた地元の唄だけれど今も地元では唄い継がれているのかな「？」と思って聞いてみた。

料理を配膳に来た仲居さん『私は埼玉から来ましたから・・・』。

次いで布団を敷きにきた青年は『ボクは大阪富田林の出身なんでワカリマセン!』。

何や、今やそういう労働事情になってんのかアホクサ!という一夜になった。

それにしても台風16号が気になる。天気予報では24日PM辺りは中部地方だとか言っているが・・・。

§ 9月23日(火) 第2日目 —— 横尾へ ——

☆☆ ひたすら梓川を遡上する11km余の行程をゆっくり歩いて

6時に目覚めた時にはホテルの正面に見える霞沢岳の頂上に裏からの陽が当たりだしたところであった。

素晴らしい天気なのに屋根からボトボト降ってくる雨みたいな水滴に一瞬ギョツとなった。

太陽が出て屋根の霜が解け始めたようだ気づいてやれやれ。

腰や脚に多少の疲れが残っているが、これは運転疲れみたいなものだ歩き出したら解消するだろう。

今日の行程は涸沢と槍沢の分岐点である横尾谷まで。

ルートは基本的には緩い登りだが、左手に梓川を眺めながらのほぼ平坦な道。

病み上がりの身体だから今回特に意識するテーマは“ゆっくりユックリ”ネパール語では“ビスターレビスターレ”だ。

昔僕等が穂高の山へ登っていた頃は、夜行列車やバスで朝上高地に着いてからは一気に涸沢まで登ってキャンプするのが一日の行程であったのだから横尾なんて単なる通過点であったのだ。

老いたりとは云えそれを二日掛けて辿る行程だ、何せ体調を手探りしながらの山歩きだからゆっくり行こう!。

2014,9,22～2014,9,27

☆ 穂高神社奥宮に山旅の安全を祈願

8:00 丁度にホテル出発、今日からがいよいよ本番の山旅。

川沿いに 1k m ばかり登って河童橋で梓川左岸に渡ったが、早や橋には大勢の人出。

小梨平辺りの小川には“バイカモ（梅花藻）”が群生している、季節柄今は花こそ咲いていないが、今も清流を保っている事の証しみたいで嬉しい。

カラマツやシラビソの高木が林立する平坦な小径を歩きながら冷んやりした朝の空気が気持ちよい。ゆっくりユックリ。

長い樹間の道から一時明るい日当たりへ出ると明神岳が青空にクッキリと見えて素晴らしい。

☆ 明神池は 50 年前の佇まいを留めていたが・・・。

10 時過ぎ明神着。河童橋から 4k m 前後。

穂高神社奥宮に参拝してこのトレッキングの安全を祈願した。

明神池一ノ池にて、新婚旅行の 50 年前、小舟を舳った栈橋で写した写真が今も残っているが、その時と何も変わらない光景が今日の前に再現されている。これぞホンマのデジャブという気分では今度はバックに明神岳を入れてみようと思いつくが近すぎて上手く行かない。



50 年前と全く同じ栈橋と舳い船の構図で。

2014,9,23

けれども、此处も若い人たちの写真の人気スポットらしく順番待ちみたいな状態になったのには参った。

二の池は記憶には無かったけれど小じんまりした庭園風の風情がなかなか良かった。

☆ 徳澤園にて。あの時はここから折り返したのだった

2014,9,22～2014,9,27

今回のトレッキングのテーマは“ゆっくりユックリ”。

それにしても時間をかけて正午ごろ徳澤園に着いた。

50 年前の今日のハイキングでは次のスケジュールの都合もあって此处から折り返したのだった。

広いテント場のミドリの草の上に座ってホテル特製の大きな握り飯弁当を戴いたが、余りの好天気には暫くは日向で昼寝。「少し油断すると直ぐ日陰になるなあ」とぶつぶつ言いながらの昼寝であった。



さあゆっくり行こうか
昼寝も足りたし横尾まで
はもう近いし・・・。
徳澤園のテント場にて。
2014,9,23

見事な青空、これがナンデ？。明日ナンデ雨にならんなんのや？。

ヤメテ！。せめて明日一杯は天気にして！。頼む！。

前穂東壁は逆光で暗く奥又白の沢も雪溪が目立つだけで暗い。

☆☆ 横尾山荘にて

明神岳を中心に大分回り込んだから新村橋からは前穂高北尾根もくっきり見えて来た。

人の多さも徳澤園までで横尾谷まで入って来るのは極く僅か、気分がイイ。

空はアップレ横尾も近い。

14 時過ぎ横尾山荘に着いた。

新しい清潔な山小屋は一泊二食付 9800 円、風呂があるのは嬉しい。

畳一畳分位の二段ベッド、私達は 17 号室の 171 と 172。

私は昔から余り縦走の経験がないのでこの手の山小屋は初めて。最近は何だか常念だ白馬だと、しきりと山登りするようになった明子(めいこ)の方が小屋の作法では先輩格。

いちいち指図を受けながらベッドに入り込んだ途端“上がり框”みたいな部分で思い

2014,9,22～2014,9,27

切り向こう脛を擦り剥いた、化膿止めだの広幅なバンソウコウだのと一騒動。

若いころなら『こんな、20cmもあるような角ばった深い囲いにしてやがって！』と怒ってキレる所だけれど流石オレも成長したもんよ、女房に『バカねゑ慌てるからよ！』なんて言われても平気で耐えていたのでありました。

横尾山荘の標識には河童橋—横尾 11km、横尾—涸沢 6kmとある。

ホテル—河童橋間や明神池往復など入れても今日の行程は 14～5km。この距離を私達は 8 時にホテルを出て横尾まで 6 時間余も掛かったのは一寸掛かりすぎかな？。

昔の 2 倍の時間。

まあいいか！。今回のテーマは「ゆっくりユックリ」なのだ。

昨日夕方空身で小一時間歩いた時股関節辺りにイヤな痛みが出て一寸心配した。

今朝も多少痛みが残っていたが、今日の 6 時間の行程を通じていつの間にかそれも忘れてしまっただけで歩き通して来た事で今はホッとしている。

意識的にゆっくり歩を運んだのは勿論だけれど、7kg のリュックを担いでいる事が却ってスピードコントロールになって具合が良いのかも知れない。

割合平坦な道とはいえ、14～5km 6 時間余をストックを使わずに歩き切った事で私の身体は一応正常な状態に戻ったと思えて嬉しい限りだ。

これが確認出来たのも今回金婚式記念の旅に涸沢までのトレッキングを決めたお蔭だから最高の結果になったと喜ぼう。

二段ベッドからガラス窓を通して前穂高東壁が黒々と、奥又白沢の残雪が浮き上がって見える。

時間は最早夕方 5 時になっているが台風 16 号の影響か、日中あれほど青く晴れていた空には白い雲が掛かって来た中、前穂の稜線が黒々と見える。

さあ明日は涸沢だ。

§ 9月24日（水）第三日目 ——— 絶景の涸沢へ ———

☆ 涸沢に向かう人はマバラ

早朝の様子を見る限り昨夜この小屋に泊まった人達の大半は下りの人達みたいで、今から涸沢や穂高に向かう人は僅かみたいだ。早朝は余りバタバタした感じは無い。

飛び石連休も終わったし台風も来ると云うし・・・。

4:30 起床空模様が気になるが・・・。

早々に朝のストレッチも終わった。昨日から私にしてみればよく食べるようになって

2014,9,22～2014,9,27

いる、今朝も珍しく飯のお代わりをした。

5:30 頃には空の一部には青空も見え穂高の尾根の一部には朝日も。モルゲンロートに染まるという程では無かったが昨夜の感じから思えばラッキーな気持ち。

アリガトウ！。気分よく涸沢へ登れるぞ！。

☆ 熊の噂に脅かされながら

6:30 横尾出発。この一時間の間にも北の方の雲はやや暗くなって来たけれど涸沢に着くまでは持つだろう。

メイコは昨年ここから槍沢を詰めて行った経験はあるが、今日は涸沢行き。明子にとってはこれから先は未知の領域。楽しみに登って行こうぜ！。穂高の絶景が待ってるぜ！。

暫くは私達二人以外は登りも降りも誰も通らないシンとした針葉樹の樹林帯を徐々に登って行った。

7時頃初めて行き交った男性『これ持っているなら鳴らしておいた方がイイですよ！。この先の木の枝に小熊が寝ていたから』と熊鈴を見せられた。

暫く行って二人目に降って来た地元の人みたいなオバサンが『本谷橋の辺りをウロウロしてるみたい』と云う。

迂闊かも知れないが“熊鈴”なんかは持っていなかった私達はどうする事も出来ず、仕方なく「人間が通りますよッ」と、時々「ホッホオー」と大声を張り上げるしかなかった。

最近をよく見かける光景だけれど、嬉しそうに鈴を着けて“チンチロチンチロ”鳴らしながら歩くなんてのは傍迷惑も考えないチャラチャラしたヤツのすることでオレは嫌いなんや、喧しいばかりや！。

そうは云うもののやっぱり気持ち良いものでは無かった。

幸い熊と出くわす事が無くて助かったけれど、二日後の帰り道で本谷橋の一寸下で、雨に叩かれた後の木の実だらけの大きなフンを見た時にはやはり薄気味が悪かった。

やがて左手川向うに恐ろしく高度感がある屏風岩が見えて次第に涸沢の雰囲気は漂って来たが（昔は重いリュック担いで下ばかり見て登ったものな）、結局本谷橋までは単独行の青年に追い越されただけで閑散とした静寂の中を徐々に登って行った。“めいこ”もクマよけに ♪登ろの一ぼーろーよー北穂一の山によ ♪ と歌いなが登って行った。この後が本番のキツさになるのに・・・。

2014,9,22～2014,9,27



朝の閑散とした針葉樹の森を抜けると、やがて沢向かいに恐ろしく高度感のある屏風岩が見えてきた。

2014,9,24

☆ 本谷橋からが本当の登り

本谷橋手前辺りで初めて北穂らしいピークが見えたが 50 数年ぶりの眼には判然としなかった。

8:00 本谷橋に着いた。槁詰の標識では横尾から 2,8 km、涸沢まで 2,4 km。もう何てことは無いやないか! ?。

ここで大休止。

この辺りで息を切らしながら登って来た三人組のオバサン達に追い抜かれた。

ええネン。私達は若い人の 1,5 倍の時間のノロノロした歩みだ。

息も上がらず心地よいスピードだ。

私の体調も別段痛む所もなく快調だ。

けれども、何度も前の石に躓いてツンのめりそうになる、これは病気のせいでは無い、やはり歳なりの現象みたいで脚が上がっていない証拠、山靴のつま先も擦り剥けている。

天気は曇りの度が増しているが午前中は持つだろう。

谷を越えた辺りから樹木の相がガラリと変わった。さっきまでの鬱蒼とした針葉樹林からダケカンバの多い広葉樹林へと切り替わってようやく高山の雰囲気になってきた。

本谷橋からは突然デスガという感じで岩道の急な登りが始った。

50 年余り前には朝からぶつ通しで、しかも重いリュックを担いで、尚且つ遥かに早いスピードで何度も登った時にもこんなキツイ登りと感じなかったのに・・・。

老いぼれた今は・・・。

この旅で初めて息が上がって休憩。

まだまだ。今日はこんな登りの連続ナノだ。

2014,9,22～2014,9,27

ナナカマドの実が真っ赤になって来た。黄葉もチラホラ一寸イイ気分。

☆ けれどこれからが結構掛かるんです

9:30 ごろ涸沢の半分も見える所まで来た。前穂の吊尾根も良く見える。

今日から二晩世話になる涸沢ヒュッテの赤い屋根も木の間隠れに見えて来たからもう着いたような感じになったけれど、ここから最期の詰めが結構長いのだ。

最早ここまで来たら奥穂も涸沢も我が手の内だけれど・・・。



最早穂高も見えるし、此処まで来たらもう近い筈なのに・・・。

これからが結構長かったのです。

涸沢ヒュッテ近くまで来たところにて。

2014,9,24

2000mを超えるとやはり草つきも違って来た、勿論今はもう花はないが“あおのつがざくら”か“岩ひげ”かも知れない草の群落が目立つ。

流石にここまでくれば涸沢の南斜面は見応えある紅葉になって来た。

テント場との分岐辺りからは、すぐそこに見えているのに結構長い。

☆☆ 涸沢ヒュッテにて

11:00 ようやく 2300mの涸沢ヒュッテ到着。

どうにか雨に遭わずにヒュッテに着いてラッキーだった。

私もめい子もこの時の体調は問題なし。

涸沢ヒュッテには個室を二泊で予約してあるからゆったり過ごそう。

支払を済ませて通された私達の部屋は“こなし”。

穂高氷河圏谷涸沢。

一万年前後の太古の昔穂高の氷河の押し出しによって出来たスリ鉢状の地形、これが涸沢カールの成り立ちだ。

2014,9,22～2014,9,27

前穂高北尾根―前穂高―吊尾根―奥穂高―涸沢岳―北穂高の峰々が円形劇場のように湾曲して連なる内側のスリバチ状地形の底、氷河が押し出したモレーンの上に建って居る涸沢ヒュッテは最高のシチュエーションにある。

めいこは勿論初めて見る涸沢の景色だけれど、私にしても 50 数年の時を経て眺めるこの光景は改めて感動を覚える瞬間であった。

長い夫婦生活の中でも特に近々 20 年ばかりは内外の山をトレッキングする度にその絶景に触れて圧倒されたり感動を覚えたりした経験は多いけれど、その経験の全ては“我が脚と汗”によって得られたものだった。

そんな楽しみ方も直近四年間程は私の脊柱管狭窄症による歩行困難のため断念せざるを得ず、遂に最悪の状態を迎えて今年三月に手術に踏み切ったのであった。

“メイコに穂高の・涸沢の絶景を見せてやりたい”という思いは何年か前から私の心の何処かに常にあった。

一直線に回復しない体調にいらだちながらリハビリを続けていたが、6 月頃になってもまだ涸沢まで登るといような事は願望の域を出ていなかった。

出発間際になってどうにか目途が立ったものの万全の自信を持てる状態までは回復しなかったから、不安を抱えながらの登りの一步一步であったけれど自分の脚で登って来られた結果として、今かねてからの思いを実現出来た事と併せて私の喜びは倍加したのであった。

☆ 又ヤラカシテしまった明子サン

部屋に荷物を置くなり先ずは涸沢ヒュッテのテラスに出て缶ビールでカンパイ！！。

『明子！よう此処まで登ってきた！』。

『見てくれ！目の前に見る穂高の・涸沢の絶景はみな君のものだ！』。

『オレも嬉しい！脚の痛みも何も感じる事無く快調に此処まで来られた、もう全快だ！』。

やはり自前の脚で登ってきた汗と共に穂高の絶壁と内懷に囲まれたカールの美しさに加えて眼を奪う紅葉に二人は只々感動したのでありました。

2014,9,22～2014,9,27



今にも泣き出しそうな空
だけれど、50 余年ぶりの
涸沢へ登って来ました。
ナナカマドは早や真っ赤
に色づいて。
涸沢ヒュッテのテラスに
て。

2014,9,24

紅葉はこれで 70%位
だそうだが、見事な彩
のザイテングラード
下。
飽かずに眺めていま
した。

2014,9,24



見える見える！。

北穂頂上への南陵のルートも奥穂へのザイテングラードのルートもジグザグの踏み
跡がクッキリみえる。

嘗ては何度も上り降りしたルートだ。頂上はすぐそこだ、此处まできたら頂上まで行
ってみるか！？、みたいな気持ちが持ち上がって来る。

止めとけ止めとけ、此处まで来るのもやっとの思いであったのだから、無理する歳で
は無いぞ。

紅葉も今は 70%位の色づきというが、ナナカマドの赤、ダケカンバの黄色に這い松
の緑が織りなす絶妙の配色は素晴らしいの一語に尽きる。

テラスの向こうの方では登りで追い越して行った三人組のオバサン達が昼食を採っ
ていたが、雨模様の中そそくさと下山して行った。

2014,9,22～2014,9,27

弁当食うためだけに苦勞して来る位なら辞めとけばイイのに。

これでも街に帰れば『涸沢へ行ってきたけど紅葉が素晴らしかった！』と云うのだろうか。これなら「私はパリもローマもどこそかも世界中の名所へは沢山行った」という話とオンナジ、見た数だけ。

オレは名所の数を競うような旅をする気は無い。

特に今はザイテングラード途中までの紅葉が色といい赤、黄、緑の配色具合と云い見事な彩だ。

そんな様を飽かず眺めていた時明子が『ワタシ頭が痛い』と言い出した。

あッ。又やってしまったな！。高山病や！、ここはもう 2300mの高地。

さっきビールで乾杯したからな！。

もう随分以前になるけれど木曾駒へ行った時、標高 2600mの千畳敷カールのホテルでビールとワインを飲んだ夜に頭痛になった。明らかに高山病症状であった。

その数年後エベレスト街道を登るチャンスが訪れた時、その経緯を思い出して“もしやこの人は高山病体質なのではなかろうな”と心配した私は再びめい子を木曾駒へ連れて行き同じホテルで“私はビール。めい子はウーロン茶”で試してみたが、全く平気であった。

安心してエベレスト街道へ出かけたのであったが、軽飛行機で辿りついたスタート地点のルクラが既に 2600mであったから勿論私も含めて以後全行程で禁酒であった。

その後彼女はツアーで国内の 3000m級の山には何度も登っているが一度も高山病で困った話は聞かなかったから、上ではアルコールは飲まなかったのだろう。

ところが、今日に限ってビールを飲んでしまったという訳。

やはり涸沢の紅葉と穂高の絶景に触れて思わず我を忘れてしまったのだろう。

一度の失敗は仕方ないけれど、二度やるヤツは何とやらと言う、我がめいこサンは思わず「又またヤラカシテしまった」のでありました。

さっきまでよく見えていた北穂も何時しかガスに巻かれ、弱い霧雨も目に見える雨粒になって来たから、それを汐に 14 時ごろ部屋に引き上げたが最早雨になっても悔しがる事も無い幸せな時間を持った。

間もなく辺りはすっかりガスに巻かれ、台風 16 号が連れて来た雨も本降りとなってトタン屋根を叩く雨音がうるさくなった部屋でメイコはバファリンを飲んで、私もコタツで暫くの昼寝となった。

☆ スグレモノ暖房機が二つ

2014,9,22～2014,9,27

帰った部屋にはもうコタツが入っていた。

石油ストーブもある。

アレ？このコタツ電気コード無い！

下は堀コタツでも無い只の畳や！。

さて、先ずはこのコタツだ、どうなってんの？。

先述したように電気でも無く堀コタツでもないのに暖かい。

私が一寸何処かへ出かけている内に係りの人が交換してくれたのを見たためこの話では“豆炭入りのカセット”を差し込んでいるのだそうだ。

ちゃんと温度コントロールも出来る装置も付いているらしいし、24 時間も持つようだ。

次いで、もう一つは手回し発電機付石油ストーブ。

ダイヤルを回してから手前のハンドルを回すとパチパチパチとプラグの火花が散り石油ストーブが燃え始めた。

どちらもなかなかのスグレモノだが、世の中にはカシコイ人が居るもんだと感心した。

当然ながらこのヒュッテには中部電力の電気は来ていない。

部屋には電灯が点いているがこれもヘリコプターで運んだ燃料による自家発電の貴重な電力だ。

☆ 用意してくれたお祝いのワインも・・・

東京事務所カマクラさんからの指図もきちっと届いていたようで夕食のテーブルには私達だけお祝いの赤ワインが用意されていた。

本当はもう一度ワインで乾杯！という所だけれどメイコは高山病で頭痛。

可哀そうだけれど替わって私が戴いてあげたが、なかなかイケるワインであった。

§ 9月25日（木）第4日目 ——身動き取れない涸沢ヒュッテにて——

☆ 雨でチンデン（沈殿）の日の閑話休題

昨日夕方から本降りになった雨は一晩中降り続いた。

夕方6時頃には止むとの天気予報だけれど、さて今日一日どう過ごすべえか。

下山組は雨の中をレインウェアで出て行った。

2014,9,22～2014,9,27

残された組は天気になればピークを目指す人達だろうが（この時はそう思っていた）流石にこの雨では身動き出来ないでアチコチでブラブラ、ボソボソ。

それにしてもギャル達の多さよ！。

今風のカラフルなコスチュームの彼女達を見ていると、50 年前の、云わば彼女達の“おばあちゃん年代”のムサクルシイ姿が目浮かぶ。

そろいもそろってチェック柄の長袖シャツを腕まくりした“まっくろけ”な彼女達、それ程多くない「山おんな」の姿とはエライ違いだ。勿論今目の前を見るギャル達の方がやっぱり“可愛い”と思わないではない。

彼女達のお目当ては日本一と云われる紅葉かな？。天気になったらピークを目指すのかなあ？。

外はそれ程寒くは無い。ヒュッテ入口の温度計は 14 度。

11 時頃、それでも登ってくる、団体さんだ。ガイドらしい人の話ぶりでは本来なら上まで登るつもりであったが今日は此处まで。

そうや、こんな滑る日に素人を連れた山登りは無理ですよ！。

北穂南陵の両側の沢は雨水を集めて滝のように流れているけど何時しかガレ場に吸収されて涸沢まで流れてくる事はない。

部屋に戻った私は書棚の写真集を見たりしながら暇つぶし。

メイコは窓の外の赤いナナカマドや写真を見ながら穂高のスケッチでこれまた暇つぶし。

ぐうたらしているだけでは腹も減らないけれど、少し小止みになった様子だし時間だから売店へ、私はおでんでビール、メイコはカレーラスを少々。

☆ ピークを目指す人ばかりでは無いんだ

午後小止みになった一時テラスで、まだ上の方がガスに隠れた北穂を眺めながら、♪ のぼろの一ぼろーよ北穂一の山によチョイセー♪。

なんて口ずさみながら、立派なカメラをぶら下げた 30 歳台と思しき青年に聞きました。

『今時はこんな唄歌いませんか？“北穂小唄”、50 年も前にはよく歌ってましたが・・・』。

「えッそんな唄あるんですか！その頃はまだ生まれてませんから知りません。奥穂の方が有名じゃないですか、奥穂の唄もあるんですか？」。

そんなやり取りをして現代の事情が解って一寸恥ずかしい思いをしたのでありました。

そうや、今ここに滞在している人達は必ずしもピークを目指す人ばかりでは無いんだよ！。

2014,9,22～2014,9,27

写真を撮る人、紅葉を眺める人、など色々な目的で今ここに居るんや、昔みたいに大半がピークを目指す人という訳では無いという事を理解したのでした。

☆ 30 分ばかりの散歩

15：30 頃雨は殆ど止んだ一時を狙って近所を散歩。

池の方に行ってみたが今は雪解け水も最も少ない季節、とても穂高が写るような状態では無かったが枯れる寸前の夏の花“よつばシオガマ”が雨に濡れてしょんぼりしているのが見つかった。

またまた降り出して 30 程で引き揚げた。



北穂も紅葉もスッ
カリ雨霧に巻かれ
て。

2014,9,25 15 時
ごろ

☆ 円形劇場の星空

湾曲した穂高の峰々が黒々と聳え立つ円形劇場のような天空にベタベタッと貼り付けたような満天の星空を眺めていた。

夜になって急激に回復した快晴の空に、北穂の方から東に天の川も流れて見える一夜のショーを二人して眺めた。

只今 23 時、フリースを着こんでいるが意外と寒くはない。

§ 9 月 26 日（金）第 5 日目 ——穂高の絶景を満喫した日——

☆☆ この山旅のクライマックスを迎えた午前

2014,9,22～2014,9,27



AM5:36に出た陽光が輝きを増して朱色に染まった5:38のジャンダルムと奥穂。見事なモルゲンロートでした。

2014,9,26

涸沢岳の見事なモルゲンロート（朝焼）。

AM5:38.

2014,9,26



北穂のピークは朱色に染まり、陰になった紅葉の森も赤味を帯びて。

AM5:38

2014,9,26

2014,9,22～2014,9,27

この時この場所に立った者にのみ味わう事が出来る見事な涸沢、見事な穂高に感動を覚える時を過ごして私達は満足したのでした。

明子サンご納得いただきましたでしょうか。

これが私達二人の金婚式記念トレッキングのクライマックスになります。

☆ やっと見られた素晴らしいモルゲンロート

この一時のために持ってきた毛糸の帽子も忘れて部屋を飛び出した朝5時半、待つこと暫し。

5:36 奥穂にやや寝ぼけたような薄い陽が射したと見る間に 5:38 には奥穂も涸沢岳も北穂も全山見事な朱色に染まったのであった。

前穂だけは逆光。

裾野の紅葉に重なるようなモルゲンロート。

10 分後には鮮やかなオレンジ色に変わる豪華な山の朝焼けショーに皆我を忘れて立ち尽くしたのでした。



朱色が次第にオレンジ色に変わってきた

5:54.

ザイテングラードの紅葉も輝いて・・・。

2014,9,26

昨夜満天の星空を眺めた時から好天は予想していたから今朝は期待はしていたが予想を超える絶景に言葉を忘れてシャッターを切りながら、かれこれ10年も前ボカラの丘から見た黄金色に輝くマチャプチャレやアンナプルナの絶景を思い出していた。

けれども、この鮮やかな朱色に染まる穂高は私達二人にとっては格別の色でありました。

☆ 紅葉の森に分け入ってハイキング

嬉しくなる程の絶好の天気誘われて錦繡を纏った穂高の中腹へのパノラマルートハイキング。

2014,9,22～2014,9,27



やや昼光色に近い黄
金色に変わった山。

只今 5 : 58 分 20 分ば
かりの光のショーは
終わった。

涸沢ヒュッテのテラ
スにて。

2014,9,26

錦繡の森に分け入
ってハイキングし
ました。

AM7 時ごろの北穂
取りつき辺りの紅
葉。

2014,9,26



ナップザックに飲み物だけの身軽な姿で出掛けた。

メイコも体調は回復、私も今やどこも痛む所は無い。

涸沢小屋で北穂南陵ルートと別れて紅葉の林の真っ只中へ登って行った。



真っ赤に紅葉したナ
ナカマドに包まれて
ワタシも染まりそう。

2014,9,26

2014,9,22～2014,9,27

身体まで赤く染まるのではないかと思うようなナナカマドの中をゆっくり登り、登りきった岩場では雪渓に遊んだ。



ワタシ最近は雪の上も結構慣れてるの。
ザイテン脇の雪渓に遊ぶメイコさん。

2014,9,26

やがて奥穂への登行ルート of ザイテングラードと合流。

今は草つきだけのお花畑の脇を少しばかり登りながら標高 2500m 辺りで振り返ると真向いに前穂北尾根がクッキリ見える。

♪ 雪渓登ってガラ場を越えりや、前穂眺める花の道 ♪。

ここは北穂への直登ルートではないが“ 北穂小唄 ”の歌詞そのままの情景が目の前に展開されていた。

振り返れば前穂北尾根が・・・。

あの時は 5/6 のコルから取りついて・・・。

若かりし頃を思い出した一時でした。
まぶしい光の中で。

2014,9,26



あの時は涸沢を横切り 5/6 のコルから五峰に取り着いたのだった。

季節は 10 月半ばを過ぎていたと思うが、もうエビのしっぽが出来ていたのを覚えている。三峰二峰とクリヤーして主峰に登りきった気分は最高。

吊尾根を通して奥穂に達した時、笠ヶ岳かどうかは怪しいがそのピークから蒲田川に

2014,9,22～2014,9,27

かけての色合いの見事さに見入った事だけが今も記憶にある。

あれから既に五十数年になるのだ。

そんな思いに耽りながら再びナナカマドに染まりながらザイテンを降りてきたのは10時頃であった。



北穂の紅葉に思いを
残しながら涸沢を降
る時。

絶好の天気恵まれ
て。

今から徳澤園まで降
ります

2014,9,26

涸沢の・穂高の絶景に満足しきった二人はこの気分を胸に残したまま、そそくさと下山の支度をしたのであった。

☆☆ 徳澤園まで下山

☆ 涸沢の下りはトントんと、の積りであったが

登って来る時は痛みの再発を警戒して恐る恐るの歩みであったが、それも克服した今は何も気にせずトントんとリズムよく下るつもりであった。

ところが、現実はそんなに甘くは無かった。

いよいよ涸沢の紅葉が絶頂を迎える時期とあって登って来る人の数は圧倒的に増え、二日前の比では無くなっていた。

特に本谷橋までは危険個所が多いのと急勾配で動きの悪い登りの人を待つ時間ばかりが長く、結構時間をつかって本谷橋まで降りてきた。

私達は結婚記念日に合わせて偶々こんな時期になったけれど紅葉絶頂期の涸沢の人出はナカナカのものみたいだ。

ここで涸沢ヒュッテで買ったアンパンの昼食。

以後は横尾まではトントんと進んだが、何故か私は沢向いに聳え立つ屏風岩の高度感に引かれて角度が変わる度にもう此れまでと云いながら何枚も写真を撮った。

2014,9,22～2014,9,27



木漏れ日が入る針葉樹の森を降って、横尾はもうすぐ。涸沢からの快適な降りにて。

2014,9,26

14:00 横尾山荘まで下ってきた。

前穂奥又白の上には薄い雲が掛かっているけれど、概して好天であった。

大休止。預けていた荷物を貰った後は快調に歩いて 15:20 今夜の宿徳澤園に入った。



とても気持ちのいい森を歩いて徳澤園へ向かっています。横尾から徳澤園へ向かう道で。

2014,9,26

横尾～上高地間の森はとても気持ちのいい道。カラマツが紅葉する頃何か又歩いて見たいくなる。徳澤園近くにて。

2014,9,26



2014,9,22～2014,9,27

☆☆ 徳澤園の部屋「仁礼（にれ）」にて

何はともあれ早速“木炭風呂”三日ぶりの風呂。

涸沢からの下りは距離も短く山下りも全く快調であったから今や体調の心配も無い位まで回復した事を感じている、行きとは大変な違いだ。

思いがけない病を得て早 5 年。

ここ数日自分の脚で体感した素晴らしい光景を振り返ってみれば半年余り前に踏み切った狭窄症の手術が今更ながら良かったと思い、今日までの上り下りで回復が確信出来たのであった。

辻野先生有難うございました。

☆ オゴレルモノ久シカラズ

着いた途端フロントにて。

当館団体のお客様で大変混雑しておりましてご夕食は 5 時の方々と 7 時の方々の二部制になっております。

それにお飲物を先に決めて下さればお待たせせずにお出しできます。

私にしてみればえッという感じ。

勝手な思い込みかも知れないが、ここは山小屋でもないし只の旅館でもない。

こじんまりした宿で何となく”ほんわか” “ゆったり”した宿とばかり思っていたのに・・・。

確かに私達の部屋はテラス付のゆったりした部屋ではあったが・・・。

話は前後するが、問題の夕食時。

結構広い食堂は満席、なるほど立派な料理だしビールも直ぐに出て来た。

ここまで下りてくればもう大丈夫という事でメイコもビールで乾杯。

山は事実上今日で終わりみたいなもの、明日はギャル達でニギニギしい上高地まで下り帰阪するのだ。

そこまでは良かったのだけれど、食事中にも拘わらず沢山ある器が空いたと見るや直ちにチャカチャカと下げに来るのには閉口、如何にも早く食え！と云わんばかりだ。

街中のビジネス街でなら解らないでも無いが・・・。

食後の談話室も座る椅子すら無い有様。

喫茶室でコーヒー。はい！ 7 時で入れ替えです！。

ここは私達の若い頃有名になった井上靖の小説「氷壁」で有名な事は以前から知って

2014,9,22～2014,9,27

いたが、墜落死した小坂の妹で魚津の婚約者になる“かおる”が待機した宿ということで今も“かおるの宿”として人気なんだそうだ。

部屋に帰って読んだ「徳澤園のあゆみ」という文集。

大勢の関係者からの寄稿文の中に上条一族の経営の仕方に関心を感じたらしい何方かの苦言があった。

「オゴレルモノ久シカラズ」を肝に銘じよ！と。

オレもそう思った。

ウツワの大きさに対して客を入れ過ぎ。

繁盛は結構だけれど経営が付いて行って無いみたいだ。

☆ 井上靖の 小説「氷壁」

この小説と徳澤園の関係については廊下に額入りで概要が掲げられている。

S31・11月から朝日新聞に連載された「ナイロンザイルを巡る山岳小説」。

厳冬期の前穂東壁に挑んだ二人の青年、主人公の小坂と魚津。

小坂の墜落死と切れたナイロンザイルを巡って小坂の自殺説、魚津による他殺説がささやかれた。

「切れない筈のナイロンザイルが切れた」のか自分が助かるために魚津が切ったのか？。

二人の出発もこの徳澤園から。

事故の捜索時、捜索隊の宿も小坂の妹“かおる”が待機した場所も徳澤園。

小坂の遺体が発見されて後、他人妻に心を惹かれながらもかおると結婚を約束した魚津。

最期に自分の気持ちを確かめるために「かおる」と「徳澤園」で落ち合う約束をして山に登った魚津。

けれども魚津が選んだのは穂高の一般ルートでは無かった。

北穂高の裏、岐阜県側から登る昼間も薄暗い恐怖の岩場“滝谷”であった。

登攀中に落石に当たって死んだ魚津は果たして何にけじめをつけようとしたのだろうか。

生きて再び魚津と会う事がなかった小坂かおるが幾晩も過ごした宿「徳澤園」は今も“かおるの宿”として山を愛する人々に人気の宿なんだそう。

確かにこの頃は旧来からの麻ザイルに替わってナイロンザイルが採り入れられた時期で岩角などとの摩擦によって切れるという事故も何件かあったようだ。

§ 9月27日（土）第6日目 ——そして我が家へ帰る日——

☆ 明子は徳澤園で誕生日を迎えた

オメデトウ明子。

今日谷明子は徳澤園にて 72 歳の誕生日を迎えた。

因みに私谷幸一は 76 歳と 7 カ月。



あの日 此处から折り返した時はまだ 21 歳だった。

思い出の地での誕生日おめでとう。

徳澤園にて。

2014,9,27

あの時は上高地を降った後青木湖や小諸、奥軽井沢の小瀬温泉など信濃路を巡った後誕生日を祝ってプレゼントした軽井沢のグリーンホテルでメイコは 22 歳の誕生日を迎えたのであった。

あの頃のメイコは野も山も知らなかった。けれども今日は山の宿で誕生日を迎えている。

オレもあの頃までの山は岩と雪だけで高山の花を愛でるとか、益してや紅葉を求めて山に登るという気分は無かった。

お互い変わったのだ。それが 50 年の味というものかも知れない。

☆ 何と気持ちの良い散歩道なんだ！

足腰の痛みも無い。気分も最高。

行きには恐るおそる時間を掛けて歩いた道だけれど今日は足音も軽くトントンと降って行く。

陽も射さない針葉樹の高木の下を歩くとき、時々出くわす木漏れ日の中を歩くとき、

2014,9,22～2014,9,27

そうかと思えば突然梓川の川辺に出てパッと明るい陽光の中に出る時。

まだカラマツの落葉が散り敷く時期には少し早いけれど、足元の砂地を踏みしめる感触も心地よい。

この梓川沿いの道は実に気持ちの良い散歩道だ。

そんな散歩を楽しみながらあっと云う間に明神を過ぎ間もなく河童橋という手前の川辺で大休止。

天気は上々。木陰は冷んやり。



体調の回復が確認出来て二重に嬉しい山旅でした。
上高地に帰ってきました。

2014,9,27

ワタシもとっても
嬉しい山旅でした。
満足気なメイコさん。
河童橋に帰って。
2014,9,27



ほんの暫く賑わう河童橋に遊んでから 10:30 発「あかんだな駐車場」行のバスに乗り込んだ。

微かな煙を上げる焼岳をバスの窓から眺めながら楽しかった山旅に満足しながら・・・。

2014,9,22～2014,9,27

☆ ただ今あッ！

明るい内に自宅へ帰り着きたいとは思っていたけれど、全ての行程は想定以上にトントンと運んだ。

6日間の駐車料金 3000 円也を払い、平湯でソバを戴いて後満足しきった二人を乗せたハリヤーは 12：00 平湯温泉から帰途に着いた。

ゆったりした行程になった事でドライブもゆっくり。

「ひるがの高原 S A」でソフトクリームなどを食べ、ついさっきまでの余韻を楽しみながらの気楽なドライブ。

この頃は 11：52 分に起きた大惨事など知る由もなかった。

途中渋滞に遭う事もなく『この分なら明るい内に帰れるなあ』と云いながら茨木 I C で高速を降り、後 20 分ばかりで自宅に着くだろうという辺りでご近所の藤野ひろこさんからメイコに「御嶽山が噴火したみたいだけど大丈夫？」のメール。

ええッ！南の外れとは云え同じ北アルプスに居たのに全く気付かなかったのです。

こうして 17：40 往復約 700 k m のドライブを終えて 6 日振りの我が家へ帰ったのであった。

§ エピローグ

口先だけは一丁前な事を云っていても如何にも幼稚な二人である事は高木(明子の旧姓)の親にも見抜かれていたからの猛反対だったのだろう。

それを押し切って船出した頼りない二人ではあったが人並な苦労はあったもののどうにかここまで平穏な生活を保って結婚五十年を迎える事が出来た。

ただ、私が現役の職業人であった間は御多分に漏れず頭の中は仕事に占有されており、家庭人としては必ずしも立派であったと云える自信はない。

その埋め合わせという訳ではないけれど現役時代の後半で、特に引退後は“二人して何かを”の時間を優先したことも事実であった。

そんな二人に共有する一番大きなイベントはやはり旅であり、特に私が 60 歳を過ぎてからは山旅であった。

時には知人の世話になりながら国内外の山野をトレッキングした楽しい記憶も数知れない。

けれども、私が歩行困難を伴う病氣を得てからのここ数年はその楽しみもぼったり途絶えた事で明子は勿論楽しみを失くしただろうし、一方で私は痛む脚をどうすることも出来ずに忸怩たる思いをしていたのだった。

2014,9,22～2014,9,27

加齢と共に体力が衰えるのは認めざるを得ないけれど、今回の山旅は金婚式を二人で祝う旅であった事は勿論だけれど、私の病気快癒によって再び二人に共有の楽しみが戻った事が確認されて喜びが倍加した旅でもあった。

私に与えられた課題はひとえに、回復した現在の体調を維持する事である。

その為に努力する事を肝に銘じて、この山旅を締めくくろう。

2014・10・14（火） 体風 19 号が東へ去った日に。

——了——